ばんぐらでしゅ

第一回ACEFシニアスタディツアー

2013年2月15～21日

毎日の活動

2月15日（金）12時30分 ダッカ到着
すぐにプーバイルへ。

プーバイル到着後開会礼拝
近隣散策/BDP生徒宅訪問

前年に亡くなった方の記念会をした後、私たちを待っていてくださったクリスチャンの方々。この後、歌ったり子どもたちが踊ったりで、もてなしてくださいました。

初めて手で食べる、本場のベンガルカレー。

2月16日（土）
朝食、オリエンテーションの後
ショモシンBDP小学校訪問
午後の部の生徒が、私たちに会
早くに来てくれていました。

午前の部は低学年の授業。

その後、生徒宅訪問。
向こうに見えるのは、台所です。
歓迎のお花をいただきました。

こちらのお宅はヒンドゥー教徒です。

2月17日（日）

カソリック教会のミサに出席。「よき羊飼い」と言う名前の教会でした。

午後、ボシュガオンBDP小学校訪問。

生徒がダンスを披露してくれまし

「大きな栗の木の下で」を振り付きで歌ってくれました。 もちろんベンガル語です。

♪"ボロボロ ガーチェ ニチェテ"

子どもたちとたくさん交流できました。

＊ダッカへ移動の予定でしたが、暴動で動きが取れないため、予定変更。
プーバイルでもう2泊。

夕方、“ナグリ” と言う場所にある、セント ニコラス神学校を訪問。
400年近く前、ポルトガルの宣教師が最初に入った場所で、教会は300年以上前に建てられました。 2年前まで遣っていたそうです。 今は新しい大きな教会堂が隣にあります。

将来のブラザー達、 全寮制です。 さすがにお庭はとてもきれいでした。
BDPのプーバイル事務所でオーガイザーをしているオモルさんの息子さんも、こちらで勉強しています。

どなたかが、小学校で「雨雨ふれふれ」を前日歌ったそうで、夕方から大雨でした。
こちらが築300年以上の地区で最古の教会。

こちらは、お隣に新しく建った会堂のモダンな内部。

2月18日(月)
プーバイルBDP小学校訪問

生徒たちの中に混じって。

風船で大騒ぎになりました。

みんな大歓迎してくれました。
子どもたちと一緒のときは、皆とても優しいお顔です。

帰りに、映画のロケ地に寄って、女優さんと写真を撮ったり、船に乗ったり、楽しい時間を過ごしました。 昔の農家等が完全な形で再現されており、興味深い場所でした。

2月19日（火）ダッカへ移動。 スラムにあるラルクティBDP小学校訪問。

朝食後、プーバイルのスタッフと記念写真。
ダッカへと向かいました。

ダッカのスラムにある、ラルクティBDP小学校訪問。
BDPのファルーク氏：「宇宙から地地球を見たら国境はありません。」

市営墓地の中にあるスラムの学校。
墓地が広がれば、スラムも退かされます。
この学校も一緒に動いて、今までに6回場所が変わりました。
でも、子どもたちは元気です。
とても清潔で整頓された教室で、熱心に勉強をしていました。

スラムの生徒宅を訪問しました。 温く迎えてくれましたが、生活は大変なようです。

出産も、このスラムの家でするのだとか。
この子も大きくなったらBDPの学校へ通うことでしょう。

最後の夜のシェアリング。
ダッカのバプテスト ゲストハウスで。
この日の夕食は、ナイフとフォークでアメリカンなお料理を食べました。
久しぶりにお湯のシャワーも浴びて、少しスッキリ。

2月20日（水）

06:45 起床、

08:00 閉会礼拝

ゲストハウス発:09:00

TG 322　ダッカ 発 13:40　バンコク着 17:10

TG 640　バンコク 発 22:35

バングラデシュで最後の朝食です。
昨日までとは大違いのメニューで、プーバイル
の食事が既に懐かしい。

アメリカンな朝食。

空港へ向かう車を待つ間、しばし童心に帰
ってブランコに乗るメンバー。
一週間の間共に多くを学び、深い思いを
共有した仲間です。
バングラデシュにさようならをするのを、
皆少し寂しく感じていました。

第一回ACEFシニアスタディツアー日程

日程		内容	備考
2/15(金)	a.m.	TG 661　羽田発 00:20　バンコク着 05:20 TG321　バンコク発 10:55　ダッカ着12:30	機中
	p.m.	近隣散策/BDP生徒宅訪問	プーバイルエリア事務所泊
2/16(土)	a.m.	オリエンテーション ショモシンBDP小学校訪問	
	p.m.	BDP生徒宅訪問/近隣散策	プーバイルエリア事務所泊
2/17(日)	a.m.	「良き羊飼い」教会(カソリック)礼拝出席 ボシュガオンBDP小学校訪問	プーバイルエリア事務所泊
	p.m.	神学校訪問・教会付属私立中学校、プーバイル地区最古の教会訪問	プーバイル
2/18(月)	a.m.	プーバイル小学校訪問	
	p.m.	撮影村訪問	プーバイルエリア事務所泊
2/19(火)	a.m.	ダッカへ移動、ラルクティ小学校(スラム)訪問 生徒宅訪問	
	p.m.	13:00 BDP事務所訪問、昼食 ゲストハウスチェックイン後買い物	ダッカ、サウザン バプテスト ゲストハウス泊
2/20(水)	a.m.	閉会礼拝 ゲストハウス発:09:00 TG 322　ダッカ 発13:40　バンコク着 17:10 TG 640　バンコク 発22:35	機中泊
2/21(木)		成田着: 06:15 解散	

第1回シニアACEFスタディツアー参加者名簿				
	性	氏名	ローマ字	備考
1	M	小倉　義明	OGURA Yoshiaki	使徒教会
2	M	朴　憲郁	Heon　Wook　PARK	千歳船橋教会
3	M	花島　光男	HANAJIMA　Mitsuo	明治学院教会
4	M	米澤　元健	YONEZAWA　Mototake	千歳船橋教会
5	F	米澤　二美	YONEZAWA　Fumi	千歳船橋教会
6	F	渡部　康子	WATANABE　Yasuko	キリスト友会日本年会
7	F	横井　禮子	YOKOI　Reiko	阿佐ヶ谷教会
8	F	太田　八千代	OTA　Yachiyo	田園調布教会
9	F	前田　恭子	MAEDA Kyoko	田園調布教会

恐れるな 小さき群れよ

― バングラデシュ訪問記 ―

小倉 義明

「なぜバングラデシュなのか、なぜＢＤＰなのか」。ほかに途上国はいくらでもあるのに、ほかに教育・福祉の奉仕団体がいろいろあるのに ―。 ＡＣＥＦ運動に参加して以来この問いが、ずっと私の頭の中にありました。 結局のところ、「バングラ、バングラ」と言い続けて、奔走している人々に引き寄せられたのだ、としか言えません。

従って、バングラデシュとの関係は、奉仕者たちへの敬愛と友情に触発されたものでありましたから、いつの日か現地をこの眼で見てみたいと、永い間願ってきました。

「百聞一見に如かず」とは、よく言ったものです。 ダッカ空港の近代的ビルとその外周を取り囲む駐車場での人混みの対象を一目見たことは、その後の感想の原型となりました。 格差社会と言われますが、その問題性は途上国においてこそ深刻に立ち現われている実情を目にしたのです。 民衆に必要なものは、衣食住の保障であるはずなのに、政情は不穏です。 中産階級が形成されなければ国家は安定しないのに、それが形成されようとしている寸前に、経済グローバリズムの大津波が押し寄せている、といった印象です。

ＢＤＰの働き人の様子を見て、感銘を受けました。 管理運営面では財政不如意から色々苦労があるに違いありませんが、粘り強く、誠意をもって努力している姿が見られました。その努力の一端は、私たちが見学したＢＤＰスクール（それは、トタン板で囲ったも文字通り寺子屋の名がふさわしい教場でしたが）で知り合った、日本の海外青年協力隊の隊員でダッカ管区の教育アドヴァイザーをしている青年たち３人が、「この学校はすばらしい。教師方の教育に熱意があり、教授法も良い。校舎内も清潔。公立校のモデル校にしたい。」と語っていた一事に表れているように思われます。

その教師方への棒給は、公立校教師のそれにとても及ばない額だ、と聞かされて私の胸は痛みました。 これは、ＡＣＥＦの責任でもある、と思ったからです。 このたびの「スタディツアー」で何を学習したかと問われるならば、＜痛み＞を覚えてきました、と私は答えることになるでしょう。

最後に、私たちツアー一行のために立ち働いて下さったＢＤＰ職員ご一同にお礼を申します。 また、ツアー参加者一同の中に、良き交わりが与えられたことを、神に感謝します。 そして、このシニア・スタディツアーの有意義性について強調し、多くのシニアたち及びシニア候補者たちに、次回のご参加を呼びかける次第です。

<初めてのバングラデシュ訪問>

朴　憲郁

過去に様々な機会が与えられて、私は欧米諸国と地中海に面するいくつもの国々を訪れたことがあり、神学校が実施するアジア研修旅行の引率者として、定期的に東北アジア諸国を訪問している。しかし、長年 ACEF の理事を務めていながら、なかなかバングラデシュのスタディツアに参加することができなかった。

ヒマラヤ山脈から下ってベンガル湾へと流れる三大河川によって造られた世界最大の複合デルタに位置し、洪水常襲地域でもあるバングラデシュは、現在1億5千万人を越える人口を抱えるが、独立以来40年間、アジアの最貧国と言われながら着実に進歩を続けて、経済開発が進んでいる。

このたび、2月に実施した一週間のシニアスタディツアの特別企画に参加して、遂にバングラデシュの BDP 本部とスタッフの方々、そしてプーバイルの事務所といくつもの近隣の寺子屋を廻り、輝く目をした多くの子供たちと女性教師たちにお会いし、語り合うことができて、とても嬉しく思う。小倉義明先生を団長とする9名のツア参加者が毎日守る朝祷・晩祷において、御言葉と人生経験に基づく証、そして毎日の寺子屋訪問の感想を互いに分かち合うことができたことは、この研修旅行をさらに豊かなものにした。

滞在期間中、毎時の食事を手で食べることにもすっかり慣れた。マイクロバスに乗って、寺子屋や市場や施設などを訪問するのに自動車が混み合う幹線道路を通るのであるが、運転手たちが荒々しくクラクションを鳴らして、ぶつかるようにして先を急ぐたびに、同乗者の私たちは何度も肩をすくませてしまった。しかし、私たちが宿泊したプーバイルの事務所の周囲は、パパイアやスターフルーツ（五斂子）やココナツが実る木々、さえずって飛び回る色とりどりの鳥たち、犬・牛・養鶏など、自然豊かで静かな森林と田園に囲まれていた。私はふと、かつて自分が幼少期に育った自然との共生を思い起こし、人口化し情報化した環境に取り囲まれている今の自分と比較していた。

皆で周囲を散策しながら、人間的なふれ合い豊かな村人たちを訪れ、BDP スタッフの友人、親戚たちと挨拶し、通訳を介して僅かばかりの会話を交わした。村々に電気はかなり入っているが、基本的に衣食住の大半が自給自足であることに気づいた。貧しく質素ではあるが、何と人間らしい豊かな生活をしているであろうかと、飼い慣らされた牛の頭をなでながら、私は率直にそう感じた。

しかしそうとは言え、貧困と工場汚染と廃棄物の問題は深刻であり、それらが自然と人間の命を脅かし破壊しつつある現実の一端を、森と田畑と村を巡って察知できる。いったい文化的生の営みと自然的生の営みとが、対立ではなく共生するために、どのような叡智が私たちに求められるであろうか。そして、将来のバングラデシュを担うべき今の子供たちに、その叡智を与える教育が可能であろうか。

寺子屋を巡って、ある時は2年生のクラス、他の所では最上級の5年生の男女の子供たちに尋ねたところ、輝く目をして手を挙げて、「はい、僕はエンジニアになりたい」、「はい、私は看護婦になりたい」、「僕は医者になりたい」、「・・・教師になりたい」と答えた。最近、公立小学校卒の生徒たちに決して劣らない成績をあげて BDP 寺子屋の5年過程を終える生徒たちが多いが、生活の困窮ゆえに中・高等学校に進み、さらに大学に進む子はほんの僅かであると、アルバートさんがプーバイル事務所に宿泊する私たちへの BDP 報告の中でそう説明してくださった。子供たちの夢が実現する道のりはまだ遠いのであろう。

ACEF 理事たちと BDP スタッフまたは理事たちと、BDP 寺子屋運動の現状と運営と将来計画などについて現地でお会いし、お考えを率直に伺いたいとの願いが今回のスタディツアの狙いの一つであったが、オリエンテーションとは別に、プーバイル事務所とダッカ本部とで、合わせて二回そうした会合がもたれたことの意義は小さくないであろう。それは、BDP 寺子屋運動のさらなる展開にとっても、ACEF の支援運動と財政にとっても、一つの大きな曲がり角、いや、第二期の段階に入ろうとしているからである。

朝夕に家事手伝いや農作業に出ている貧しい家庭の子供たちが午前または午後に、それぞれの寺子屋に通って、小学校１年から５年までの各クラスでベンガル語文字、英語、社会、宗教などを学んでいるが、青い空のように輝く目と、喜びあふれる意欲的な学習の姿を、私たちは６～７カ所の寺子屋を訪れるたびに見ることができた。教育の原点がここにある。まずここから、教師たちがあの叡智を求めつつ各教科を教えることができれば、と願う。

ダッカでの大規模反政府デモ（ホッタル）が起こったため、私たちは急遽予定の一部を変更し、もう二日プーバイルに泊まり、ようやく第五日目にしてプーバイルからダッカに移り、スラム地区のラルクティ BDP 小学校（寺子屋）を訪れ、その日にバプテストのゲストハウスに一泊した。

ラルクティ BDP 小学校を訪れた時、数人の生徒たちが用意した貴重な紅の切りバラを、私たちに一本ずつ渡して歓迎してくれた。かつて日本の多くの庶民の中にもあった、その真心に、私も心から感謝した。これに関連するある新聞記事を数日前に読んだ。「幕末の日本、長い鎖国から国を開いた日本に来た外国人が驚いたのは、愛想のいい庶民による礼儀正しい歓待だった。中でも彼らが感動したのは、貧しい人々が自らのなした親切に代価を求めないことである。あるスイス人は散歩道の農家で歓待され、庭の一番美しい花を切って贈られた礼をしようとしたが、あるじは受け取らない。『親切と真心は庶民階層全体の特徴だ』はその人の観察である」と。

ラルクティ BDP 小学校（寺子屋）には、日本の青年海外協力隊（JICA）派遣によるボランティア教師数名が、女性教師たちの教えるクラスに入って助手を務め、また授業参観しながら、効率的な教授方法や教材使用法を考案し、それを後で提案し、実施していた。これは、教師教育の指導も兼ねる試みと言える。こうして、いわば一貫した教授法を普及させて、BDP 全小学校のモデル校になりつつあり、事実、他の BDP 小学校の教師たちがここに実習にやってきていると言う。スラム地区のラルクティ BDP 小学校が全校のモデルとなりつつあるとは、センセーショナルな話しではないか。「そのことを期待して試みています」と、ベンガル語の流暢な若いボランティア教師が、教室の片隅で私にそっとそう話してくれた。彼には数日前にすでに、私たちがプーバイルのある BDP 寺子屋でもお会いしたが、２年間のボランティア教師活動を終えて、まもなく日本に帰国するそうである。彼曰く、「公立小学校よりも、教師の教授法・生徒の成績とモラルとしつけにおいて、BDP 寺子屋の方がずっと優れています」と。彼とバトンタッチするようにして、１ヶ月ほど前に派遣されてきた若い女性ボランティア教師もそこに来ていた。彼女は、毎日ダッカ市内の宿舎から人混みをかき分けて、リキ車かオンボロバスに乗って、遠路この小学校に通っていると言う。これは、私にとって驚きであった。

プーバイルで私たちは、セブンスデイ・アドベンティスト宣教による中規模の hope mission school の横道をマイクロバスで何度も通り、またカトリックの優れた私立学校

と修道士養成学校を訪問することができた。またクリスチャン村にも行って、寺子屋の多くの子どもや女性教師や親とお会いし、BDP の一スタッフの家にも入らせていただいた。信教の自由が保障されているからである。歴史を振り返るならば、東パキスタンのベンガル人はイスラム教を奉ずる国家建設のため、ヒンドゥー教徒地域のインドからのみでなく、西パキスタンからも袂を分かって１９７１年にバングラデシュ共和国となった。この際に百万人以上の人々が同じくイスラム教を奉ずるパキスタンの軍隊によって殺され、一千万人にのぼる難民がインドに逃れた。それゆえに、バングラデシュは独立以来、イスラム教徒が多数を占めるにもかかわらず、イスラム教を必ずしも国教としない世俗国家となった。そのことと重なって、少数ながら他宗教の信仰も保証されている。

セブンスデイ・アドベンティストのミッションスクールとカトリックの学校を訪問し、少数ながら寄り添って居住するクリスチャン村を訪れた後、ふと思ったことを、私は翌朝の朝祷会でも一言お伝えした。キリスト教信仰・精神によって進める BDP が charity school（慈善学校）タイプのこの寺子屋運動に通う女性教師らと１万人を越える子供らのほとんどは、イスラム教徒に属している。そこで当然ながら、拙速な布教的意図を全面に出して、関係者多くに警戒心を与え、争うことがあっては決してならない。諸宗教を互いに認め合って共存し、匿名の教育的奉仕をすることに意味がある。

ところで、キリスト教教育の歴史から考えると、伝道（ケリュグマ）と教育（ディダケー）と奉仕（ディアコニア）の三本柱の内、charity school タイプはその内の教育と奉仕の混合体と考えられる。では、第一の福音伝道、しかも教育による伝道（mission school）もしくは福音的叡智による人間形成ということは、この BDP 寺子屋運動の＜将来＞において、いかなる場面においても（例えば、キリスト教的入学式や終業式、卒業式）生かされる可能性はなく、匿名であり続けるのであろうか。私はその当たりのバングラの状況に習熟していないので、BDP スタッフの方たちからこのあたりの今の宗教事情や将来の可能性について、機会があれば伺ってみたい。

シニア・スタディツアーの感想、疑問など

花 島 光 男

バングラデシュを訪問するのは初めてで、事前に多少の予備知識と思いガイドブックを見た。領土は日本の約４割、人口は日本より少し多い。人口密度はかなり高いのだが、首都ダッカの周辺でもそれを感じない。国全体がガンジス川の広大なデルタ地帯で、平坦な土地はどこにでも人が住めるから。雨季と乾季では風景が全く異なるらしい。乾季では水田でも雨季には水没し川か湖のようになると聞く。世界の最極貧国のように言われるが、ベンガルは肥沃な土地に高度の文化と豊かな経済が生まれ、かつてはインド、南アジアの中心であったらしい。ムガル帝国支配とイギリス東インド会社による搾取の歴史で現在の姿になった。空港から出て初めて車窓から見た街は雑然としているが活気がある。

宗教を理由にインドと分離独立したのに、イスラム教以外の宗教にも寛大であるらしい。ＢＤＰ施設のあるプーバイル地区はヒンドゥーやキリスト教の集落も多くあるようだ。学校近くの集落ではヒンドゥーの神が祀られているのを見かけ、またキリスト教の集落も訪問した。日曜日の教会出席はカトリックのミサであった。その日の夕刻にナゴリにあるタレンティーノの聖ニコラス学校を訪問。ここには１７世紀、ポルトガル時代の礼拝堂があった。この地はベンガルキリスト教史の最初期で必ず記されるイエズス会宣教師が伝道した土地で、キリスト教信徒の多い土地らしい。ＢＤＰのスタッフの多くがクリスチャンと聞いたが、ここでのキリスト教はカトリックのことらしい。

今回のスタディーツアーはシニアのツアーとして企画され期間も現地５泊と短期間で、学生ツアーのように精力的に動くことは当初より予定してないと承知しているが、期待したほどの見学はできなかった。ダッカではホッタールといわれる大きなデモとストライキで、交通は止まり、外国人は外出しないようにとのこと。デモはバングラデシュ独立の歴史と深く関係し、ベンガル語、イスラム教関連の事であり、またパキスタン、インドとの関係、独立当時にどのような立場をとり、また行動したかが、今でも問われ、追及されているらしい。これらのデモは年中行事のように起こるが日本では報道されない。そのためツアーは予定を変更し、プーバイルのＢＤＰ施設に４泊することになった。その間、近くの学校訪問、宿舎周辺の散歩などで時間をすごした。

おかげで朝はたくさんの鳥の声で目を覚ました。２月は一番過ごしやすい季節と聞く。寒くなく暑くもない。夜は多少冷えることもあるが、シャツ一枚でも過ごせる。しかし常に周囲に蚊がいて、空港の入国審査のところでも蚊が一杯いた。蚊取線香は必携。食事で箸、フォーク等を使わず手だけで食べることには抵抗感があり、慣れにくい事だった。バングラの人はいつも手を清潔にしていることを意味している。トイレも同様。

今回のツアーではプーバイル宿舎近くで３つの学校を訪問した。いずれも建物は貧弱で粗末であった。トタン板の壁、屋根の校舎では夏は暑く、雨の日は雨音が響くと思われた。窓が小さく電燈の照明がない教室は晴れた日でも暗い。まだまだたくさんの現場を見たかった。またこれに対し正規の公立学校はどのような校舎設備で、どのような授業をしているのだろうか。私立学校はあるのか。たくさんの学校を訪問して

みたかった。
　それでも子供たちは元気で嬉しそうにはしゃいでいる。家計のために働かねばならない子供にとっては、学校にいる時だけが、子供に戻れる時だからと聞いた。

　帰国の前日にようやく初めてダッカの町に入った。墓地の近くスラム地区の学校を見学。その後、アーロンというデパートでの買物時間、ＢＤＰの事務所を訪問し昼食、その後バプテストの宿舎に到着。外出はしないようにとの注意もあったが、一人で街に出た。ミルプール通りを地図も持たずに東南方面に歩き、帰ってから地図を見ると国会議事堂近くまで歩いていた。前日まではデモがあったと聞くが、街にその気配は全く感じられない。モスクの立ち入りもこころよく許され友好的であった。そこでは日本人の私に興味をもつ青年たちから質問攻めあった。旅が安全であることは最優先であるが、プーバイルでの留め置きは慎重すぎたのではないかと思われた。

　今回のツアーでは、ＡＣＥＦの理事の方々がＢＤＰの代表者と率直な話し合いをすることを大きな目的にしておられたことを知った。そのための時間をとり説明を聞き、また話し合いがあったが、必ずしも十分納得のゆく話し合いができたとも思えないまま終わったようだ。ＢＤＰはダッカに大きな事務所を持ち、全国各地で教育活動を展開している。相当の活動資金を必要とするであろう。活動資金をいかにして確保しているのか。ＡＣＥＦ以外からも支援を受けることについての考え等についての話は微妙な問題があるらしい。

　私は今回のスタディーツアーに参加し初めてバングラデシュでのＢＤＰ組織を認識した。そしてＡＣＥＦとの関係、パートナーの意味、ＡＣＥＦによる経済支援はＢＤＰ活動資金の中でどのくらいの割合になるのか、主に何に使われているのか、今後の中長期的見通しをいかに考えるのか、また毎回のスタディーツアーをどのような意識で受け入れてくれているのかなど、また日本におけるＮＧＯ活動としてのＡＣＥＦの可能性と限界について、知りたいと思い、また考えるたくさんの宿題が残された。

シニアスタディーツアーに参加をして

千歳船橋教会　米澤　元健

ダッカの空港から宿舎まで小倉先生をリーダーとする我々、シニアツアーの 9 名は車でプーバイルの宿舎に向かいました。ガジプール県のプーバイルには BDP のエリア事務所があります。道はほぼ舗装されていますが、そこに横っ腹に多数の擦り傷のあるバス、乗用車、タクシー、オート三輪乗合タクシー、自転車タクシーがひしめいていました。それぞれが自己の存在を警笛をかき鳴らすことで主張します。車間距離は数十センチあるいは数センチです。十分にカルチャーショックを感じさせられました。

宿舎は一転して、静かな郊外の趣でした。朝は色々な鳥の声、鶏が夜明けを告げ、そしてクルアーンを唱える声で目を覚まします。この国は 90%以上がイスラム教徒です。宿舎の周りにはバナナ、マンゴ、スターフルーツ、ジャックフルーツ、3 センチほどのリンゴのような果物などが木に成っているのが見られました。

プーバイル近郊の BDP の運営する小学校、四校を訪れ交流をしました。校舎は水田と緑の木々の中に建てられ、屋根はトタン板、壁は土壁か煉瓦でできています。暑さを避ける為か、窓はとても小さいのと感じられました。校舎の中は竹で編んだ〝仕切り〟で区切られ、四から六クラスの編成となっています。長机と長椅子に３から４名の生徒が腰かけて、一クラスは３０名ぐらいでした。そして二部授業ですから、二倍の生徒がいると言うことになります。半分ぐらいの生徒が水色の簡単な制服を着ていて、簡単な布製のカバンを持っています。教科書は国から支給されそれをもとにきれいなサリーを着た女性の先生が教えます。

我々が訪問した時はベンガル語の読み書き、算数（数字もベンガル語独特の文字です）、英語をやっていました。しばらく見学をさせていただいた後、我々もベンガル語の歌詞もある「大きな栗の木の下で」を動作をつけて歌いました。子供たちと風船バレーやゴムとびをしました。簡単な手品をやる方もいて、子供たちは大喜びでした。

ダッカの公共墓地のそばを不法占拠しているスラムの小学校は床があり、靴をぬいで、見学しました。壁には生徒が描いた水彩画の作品が貼ってあり、英語やベンガル語の教材もいくつか見られました。日本の海外青年協力隊のメンバーの協力もあり、モデル校となって、他の地区からの見学者も多いと言っていました。ここでは NASA から地球を撮影した写真をプリントしたビニールのボールを生徒に見せて日本とバングラデシュがいかに近いかを知ってもらいました。また、折り紙の兜と日本の甲冑のカラー写真を先生に渡し、後日利用していただくようにお願いしました。

バングラデシュの初等化教育は著しく進み、全国の初等教育純就学率は 2010 年には 93%に達しています。初等教育を担うのは政府立学校、NGO によるノンフォーマル学校、私立学校、マドラサ（イスラム教育学校）など様々です。(バングラデシュ　地球の歩き方　2012 年発行)BDP が担うのはこのうちのノンフォーマル教育に分類され、６つの地域で 498 のクラスで 23,471 人の生徒を教えています。(BDP 配布資料）バン

グラデシュ最大のNGO、ブラックは7万2千人のパートタイムの大半が寺子屋の教師で、3万2千ヵ所の寺子屋で約百万人の子供を教えています。(バングラデシュ　地球の歩き方　2012年発行)

今後、この国の政策の中で、初等化教育がどのような方向に進み、それを踏まえてBDPがどのような方向に進もうとしているのか大変難しい選択を迫られるものと思います。その選択の一つは量の時代から質の時代への変るのかもしれません。それぞれの初等教育を担う団体間の競合が発生する可能性があります。

この国の子供たちが学校に行けることを喜び、教室で教えられることが国と自分の未来を開いていくという確信を表すかのようなキラキラ光る眼と笑顔が忘れられません。ぜひACEFの皆さまと一緒にバングラデシュの彼らに手を差し伸べていきたいと思っています。最後にツアーご一緒させていただき、信仰を具体的な行動として、実践されてきたメンバーの皆様にお礼を申し上げます。有難うございました。

バングラデシュの魂

千歳船橋教会　　米澤　二美

高度を下げ始めた飛行機の窓からバングラデシュを見おろした時、地図で予想してきたにも関わらず、その風景に私は目を見張った。今まで見たこともないようなスケールの大河が大地を蛇行し、その支流と思われる川が、数えきれない葉脈のように大地を覆っているのである。太陽を反射して光っている川は、大地を分断し、所によっては湿原のようにさえ見える。民家はまばらである。川からの恵みを得ていると同時に、悪天候の時に水害を食い止めるのは、人の力では不可能のように思われた。

北海道の 1.7 倍の国土に、世界７番目と言われる１億５千万を超える人々は、どこに住んでいるのだろう。さらに飛行機が高度を下げ、ダッカ上空から飛行場に向けて旋回すると、たちまち密集する家々とビルとがグンと迫ってきた。BDP のスタッフの方々の出迎えを受け、人であふれる街に一歩足を踏み出すと、痛いほどの視線が私たち一向に向けられた。ひっきりなしに鳴らされる車のクラクションの喧騒と行き交うリキシャやオート三輪、乗り降り自由な満員のバス、無謀に行き交う歩行者をものともせず、巧みに運転するドライバーに身を託し、五感が一気に目覚めさせられた。スタディーツアーの幕開けは期待と不安で始まった。

しかしその不安はBDP スタッフの方々の心遣いと、同行者とのシェアリングによりあっという間に消え去り、豊かな学びへのスタートとなった。

まず、宿泊所となったプーバイルの環境に私は魅了された。周辺の木々には果実が実り、様々な鳥が鳴き交わし、ヤモリまでもが部屋で鳴いた。少し歩くと水田が豊かに広がり、牛もヤギも犬も鶏もアヒルも共に暮らしの中にいる。時折大音量で響くコーランの祷りさえ、鳥たちの囀りを妨げてはいない。自然の音楽の中、雨上がりの朝靄を通し射し込む光や、全てをシルエットに変えてゆく黄昏の空を、BDP 事務所の屋上に上がって楽しむ事ができた。

この旅の予習のために、と読んだラビンドラナート・タゴールの詩の一遍を思い起こした。人の運命を「露の玉」と嘆き創造主に問いかける詩である。

『「私はあなたを夢みています。けれどもあなたに仕えることは、私には望めません」露は泣きながら言った。「私はあまりに小さくて、あなたをわたしのなかにお迎えできません、大いなる主よ、そのために、私の生命はすっかり涙なのです。」「わたしは涯しない空を明るく照らしている、けれどもわたしは　ひとしずくの露にもわたし自身を与えることができるのだ。」このように太陽は言った。「わたしはほんの**ひとひらめき**の光になって、おまえをいっぱいにみたすだろう、そうすれば、おまえの小さな生命は　笑いきらめく玉となるだろう。」』

そして、どこの学校訪問に於いても、この「小さな生命に宿る、笑いきらめく玉」を、子供たちの目の輝きの中に見ることになった。低学年のあるクラスで、私はベンガル語の詩の暗唱を聞いた。雨を喜ぶキノコと蛙の絵が描いてある教科書のページに、その詩は書かれていた。初めは教科書を指でなぞっていた子供も、やがて眼は私たちを見据えながら「聞いて！聞いて」と言わんばかりに大きな声で暗唱している。明るく、リズミカルで心地よいベンガル語の響きに心が震えた。バングラデシュとは「バングラ＝ベン

ガル人のデシュ＝国」の意だと教えられたが、この時ベンガル語に宿る国民の誇りと魂を感じることができた。

詩をのせて歌う音楽も独特のものであった。イギリスの統治が 90 年も続いたというのに、教会で歌われる讃美に至るまで、それは西洋音楽の基礎となる拍子や小節に収めることができない。当然五線譜に留められない独自の節回しは、語られる言語に相応しいものであるのだろう。借り物ではない魂の旋律である。

タゴールの 80 年の生涯は、全てこのイギリス統治時代に重なっている。イギリス式の詰め込み教育の中で、三度新しい学校に変わってもタゴールはいわゆる「おちこぼれ」であり、生涯 1 枚も学校の卒業証書を手にすることはなかったと言う。しかし、家庭での学びは早朝から日暮れまで続けられ、知識欲や好奇心を刺激し引き出されていったのだ。タゴールは教育について次のように書いている。「教えることの主な目的は、意味を説明することではなく、心の扉をたたくことなのだ」と。後年タゴールの「森の学校」創立の重要な動機である。

BDP の学校は、高い囲いや鉄の扉に閉ざされることなく、人々の生活の中で行われていた。学校は親の願いでもあり希望でもある。ダッカのスラムの学校ではとりわけ、その思いを強くした。子供たちには誇りこそあれ、卑屈さの影はどこにもない。「寺子屋」の発想がこの子供たちにはふさわしく、うらやましい形であるとさえ思えた。

そして日本で失われてしまったものを強く感じた。

集落の人々は肩を寄せ合って暮らし、また訪問させていただいたお家の方々は、笑顔で迎え入れてくださった。ここでの暮らしは質素で不便と予想していたが、必要最小限のものは整っているように思えた。家族、親族、人とのコミュニティーが、人々の喜びと楽しみの核にあることを感じさせられた。

スラムに隣接する墓地には小さな子供のお墓が沢山あった。死別の悲しみと隣り合わせの環境で、子供たちは勝ち進む為にではなく、皆と共に生き、共に幸せになることを望み勉強に励んでいるのだろう。手を差し伸べ「See you again!」と言ってくれた少女の言葉が、今も私の胸を熱くする。

この旅で私は新たに「心の扉」をたたかれ、この世に生かされ、感じ取る事の大切さを知らされた。BDP スタッフと同行者の皆様の支えがなければ、まったく立ち入れない学びであった。そして今、聖書のみ言葉が新たな光を放って、語りかけてくるように思えるのである。

バングラデシュ訪問

2013年2月
横井 禮子

訪問したどの学校でも狭い教室の長い机と椅子に三人ずつきちんと腰掛けている子どもたちが、黒い大きな目をキラキラと輝かせて先生の方をしっかり見つめ勉強している様子が、大変印象的でした。
或る教室では 英語の時間 M・N・O・P を一字ずつ全体で学んだあとめいめいノートの字を指差して M、moon, P, pen などと発音しては、隣に座った私にも聞かせてくれ、こちらも発音して一緒に喜ぶと次から次と皆が順に聞かせてくれ、文字がわかる、言えることが本当にうれしそうです。 何冊もの教科書を大事そうに持って、学ぶことの喜びと誇りを小さいながらも、いえ小さいからこそ感じているようでした。

算数の授業では小さいさいころ型のもので数を数えてはベンガル文字の数字を学んで、簡単な足し算をしています。 或る旧王室ではホワイトボードに気合田一桁の足し算を一人ずつ答えている時、勢いよく答える子どもたちの中で一人の男の子が口ごもっていると、他の子どもたちは言いたくてたまらない様子に先生は目と指でそっと制し、しばらく待ちやっと小さい声で言った答えが違っていると丁寧に繰り返し教え、とうとう正しい答えが言えたときその子をそっと抱き寄せるようにされた仕種に、温かさを感じました。 教師として当然のことかも知れませんが、教室の大勢の子どもたちと一人ひとりの子どもを導いておられることが思われ感動しました。

ダッカのスラム街の学校で高学年の教室では国語の授業、詩の暗誦や一人ずつ名前と出身地を話す姿は自信に充ちているようでした。 低学年では5～6人のグループに分かれての勉強、丁度先生のついていないグループに座ってみると、子ども同士めいめい持っているさいころ型に字の書いた物を開けては読んでいます。 私にも読ませてベンガル文字を教えててくれる、同じように言ったつもりでも発音が違うらしく、大笑いで何度も教えてくれるのが嬉しくてたまらないようで、一緒に楽しい勉強の時間でした。

静かに集中して学ぶ一方で、色の名をベンガル語と英語で習っている教室で、丁度持参していた色のゴム風船を先生にお渡しすると、早速色の名を言いながら膨らませて、ポンと投げ教室中飛び交い始め、とうとう先生の指示で外に出て幾つもの風船を大勢の子どもたちが夢中で追いかけて遊んだ時は、驚きもし、授業の妨げになったのではとちょっと心配もしましたが、子どもたちの溌剌とした面を見ることができ嬉しく思いました。

吹きさらしの小さい窓と入り口からの光だけで暗い教室は、寒い日も酷暑の日も雨が吹き込むこともあるでしょう。 見学を終えて校舎の裏側を帰る私たちに小さい窓の桟越しに手を振って送ってくれた子どもたちの姿に、もっと明るいしっかりした校舎に改善していけるよう協力していかなければとの思いを強くしました。

何軒かの家庭を訪問、気持ちよく迎えてくださいました。 日本の今の感覚からいえば貧しく原始的とさえ見える生活の場がそれなりに片付き整えられている感じでした。 小屋掛けの土間の台所には女性の苦労が思われます。 お年寄りから赤ちゃんまで何世代も又親族も寄り合い助け合っての暮らしに何ともいえぬ温もりを感じ、陰には問題もあるとは思いますが、今後現代的な生活が入ってきても、大事にされるよう願わずにはいられま

バングラデシュの旅から帰って

2013年2月

渡部 康子

私のバングラデシュとの関係は1985年頃全国友の会でバングラ訪問プロジェクトが始まったことにさかのぼる。もっとこの国を客観的に知りたいと思った時にT大学で他大学や社会人を大学院に受け入れるという記事が新聞に小さく載った。筆記試験を受け、面接では ここにはバングラの専門家はいないが国際政治の公共政策でよければと告げられた。2年間 よい指導をうけ、“バングラデシュにおける日本のODAとNGO”と題して修士論文を書いた。その後数回訪バの機会があり今回は10年ぶりの訪問であった。

どんなに変わったか見るのを楽しみに1週間の旅に加わった。プーバイルでの宿泊は、停 電、ガスや、飲める水道なし，夜警が46時中いるなかで夜を過ごし，蚊，蠅もいて、ゴミは 庭や道路に散らかりと一見以前と変わらないように見えたが実際は停電にはすぐ自家発電に切り替わり屋上の発電室が整っていた。訪ねた小学校の子どもたちは元気で人懐っこく 先生たちはしっかり教えていた。訪ねた農家で寝ているあかちゃんがそのまま私に抱かれて眠ってくれて嬉しかった。宿舎で用意された3度の食事はカレーがおいしく野菜、牛肉、 鶏肉、魚肉と上手に使ってあり生野菜も添えられ、ルテイー、甘いお紅茶と心のこもったものだった。油をたくさん使った調理で偏りがなく手でいただいたのもさらに食事をおいしいものにした。

朝は小鳥のさえずりと鶏の鳴き声で目覚める、東京では得られない時を 過ごした。最後の2日はダッカに移動しミッショナリのゲストハウスに泊まった。ここで は熱いお湯でシャワーを浴び、清潔なタオルが用意され、おいしい洋風の食事が用意された。移動の時、10年前は首都ダッカの町にひとつの交通信号もなく驚いたが、まさか今回はと思っていたがそのまさかが現実で、車が増えただけ喧騒は増し、危険度も高いなかバスと、リキシャと、乗用車と、人人がまざり合って埃をまき上げつつ大変な交通事情となっていた。 国民一人当たりの所得は10年前の、日本の1/100から1/60に上がり、女性の識字率 は６０％となり、ＢＤＰの学校数は今や86校、生徒数23,471人と報告を聞いたあとでは なかなか受け入れがたい現実だった。幸い先生方の献身的な指導により、ＢＤＰ校で学ぶ子供たちはレベルの高い教育を受け、国の共通試験にも良い成績を残し、最高学府に進学した卒業生もいると聞いた。と同時にこれだけ必要とされて増え続けたＢＤＰの学校が、今後も同じで良いのかとの疑問も消えなかった。この国のインフラが整い、海外からの投資が 期待できるようになり、産業が活発になる時に備えて人材を育てようという尊い使命を持って教育にかかわってきた。ベルトコンベアで大量生産が可能になるのと違い、一人ひとりを大切に育てる教育を思うと、やはりＢＤＰの学校の適正数ということは考えられるのではないだろうか。日本の国がアッと言う間に近代化したのとまた違う、この国のスピードでバングラデシュらしい発展をすることを願う。欧米やカナダで’援助疲れ’という声が聞かれて久しい。その轍を踏まないようＢＤＰとＡＣＥＦが息の長い良い関係を保っていきたいと切に願う。

快く私たちを受け入れてくださったアルバートさんをはじめＢＤＰのみなさん、たくさん の用意をして送りだして下さったＡＣＥＦ事務局、楽しい時をともにツアーに参加したみ なさまお世話になりました。ありがとうございました。

せんでした。

周辺の草木は黄土色の土埃をかぶって、葉が息も出来ないような有様でしたが、一日の雨で表れ緑を取り戻しほっとしました。 整然と植えられた青田や溜池、民家の近くの溝に流れる青黒い排水に将来の思い問題が思いやられました。 街道に出ると小さい店々、沢山の人々や力車の間をものともせず、クラクションを鳴らし続けてすれ違う車に驚くばかりでしたが、それにも増していたる所に散乱するゴミには唖然としました。 公のところを清潔に保つことなど全く無関心なのか、自然に返るゴミばかりの長い生活習慣のところへ急激に人工的なゴミが増えたためか、行政の施策は全くないのか、テレビや形態の普及する前に町を清潔にすることも大事ではないか、これも必要な教育のひとつと思いました。 道路脇で煉瓦割りの手作業をする幼児連れの母親、ダッカの歩道でいざって物乞いをする老人など心が痛み、人々の生活の土台が少しでも改善さえるためにそういうことを見る目や考える力をつけるには、先ず小学校の読み書き算数を覚え向学心を養っていくことが、アルバートさんの話された大海の一つのひとでであってもＢＤＰの運動は着実に続けていかなければ、そのためのＡＣＥＦの協力がいかに大切か知らされました。

訪問先の生徒達が手に手に花を持って私たち一人ひとりに手渡して歓迎してくれた笑顔、カトリック教会で礼拝中、床で立ったり座ったりに難儀している私たちの一人に、傍らで特別らしく腰掛けていたご老人がさりげなく自分の椅子を譲って下さったこと、訪問先のお婆さんが庭の木の実を手にいっぱい手渡してくれた満面の笑顔、高いステップの車の乗り降りにすっと手を添えてくださったり重そうにしている袋を持ってくださったりスタッフの方々の色々な細やかな心遣い。 又どこでも見られた穏やかな笑顔と共に、町のクラクションの鳴り続ける喧騒の中でも怒鳴りあいなど見なかったのは、この国の国民性なのか、少なくとも最近の東京では減っている温かな空気をあちこちで感じることが出来ました。

朝早く鶏の声に目覚め、林の向こうに上る朝日をながめつつ屋上で、小鳥のお囀りを聞きつつ庭で持たれた朝の礼拝、時には停電でろうそくの灯を囲んでの夕拝、先生方の聖書のお話しもメンバーのお一人ひとりの経験を通してのお話しも心の糧をいただき静かに祈る貴重なときでした。 これからの生活のなかで、思い巡らす種をいただいたことは感謝でございます。

予備知識も少ないまま、ＡＣＥＦの重要な責任を持たれている先生方の中に加えていただいて、私の見聞きしたことはほんの僅かで浅いものであろうとは思いますが、学ばせていただいたことは、得がたいものでした。 参加をゆるされた私がこれから出来ることは、一つは実感を持って周りの友人知人にＢＤＰの働きや現地の様子を伝えてＡＣＥＦに協力する人を少しでも増やすこと、もう人地はあの暗い教室で一生懸命学んでいる子どもたちと先生方のことを思い、今与えられている立場でもっと謙遜に学び、主のご用のために働かせていただくことではないかと思います。 そしてバングラデシュにもこの日本の社会にも「みこころの天になる如く地にもなさせ給え」と祈り続けたいと思います。

この機会を与え導きくださった神様、あたたかく受け入れてくださった皆様、準備から日々のプログラムの進行まで骨を折ってくださった多くの方々に心から感謝申しあげます。

以上

バングラデシュの旅を終えて

2013, 2, 28
大田　八千代

バングラデシュは初めて訪れる国でした。準備会の時にトイレの使い方やシャワー、食事の仕方などを聞き少々不安になりました。しかし、現地の生活に慣れてみると何不自由なく、むしろ、快適と言えるほどでした。

美しいさまざまな鳥の鳴き声とコーランのお祈りで目覚め、緑に囲まれたすがすがしい澄んだ空気の中で朝禱から一日がはじまりました。
毎食いただいた食事はこの上なくおいしかった。同じカレーでも味が少しずつ違いあきることはなかった。調理方法を見せて頂いたがボールいっぱい細かく刻んだにんにくとショウガをすりつぶし、スパイスとする愛情のこもった調理方法にわたしは感心した。食後にだされるミルクティにも愛情を感じた。

ダッカの空港からプーバイルまで人、人、おんぼろバス、車、リキシャの中を何度も車にぶつかりそうになりながら、両側の小さい店、ごみの山をとおって、到着したプーバイルは天国のようだった。

オリエンテーションでアルバートさんから国の教育機関がいかに少ないか、BDP は無数のヒトデの中から一つのヒトデしか救えないかもしれないが BDP はそのような姿勢で無数の子供たちに教育の機会を与えているのだと話されました。

寺子屋をいくつか訪ね、子供たちが目を輝かせて一生懸命喜んで勉強しているのを垣間見ました。私達も赤とんぼなど日本の歌を紹介し、子供たちもベンガル語で日本の歌を歌ってくれました。BEJOY という男の子に英語でアルファベットが言えますかというと、嬉しそうにÅから Z まで見事に暗唱してくれました。 とても熱心で利発そうな子供で印象に残りました。
子供たちの住まいも見せてもらいましたが何もない質素な佇まいでしたが、温かさを感じました。 私が２０数年前に YWCA でかかわっていた生活保護世帯、母子家庭、父子家庭の子供たちよりもよほど幸せなのだと感じました。 貧しいけれどもお父さん、お母さんあるいはおじいさん、おばあさんに温かく守られていること家族のぬくもりを感じました。
この子供たちが悲しい目に合うのは、ドロップアウトしないのはもちろんですが、中等教育をおえて、社会の接点にきたとき、仕事もない、何もすることがないというときに、味わうのではないでしょうか。
そういう意味で中等教育で職業訓練は急務ではないでしょうか。

YWCA でも募金による自己資金だけではやって行けず、国、都、区の行政の援助を得て、療育事業を行うようになりました。BDP も SAJ の協力を得て活動を遂行するのは仕方がない流れだと思います。

最後に行ったダッカのスラムは衝撃的でした。子供たちは明るく元気で熱心に学んでいましたし、先生は威厳をもって自信にあふれて教えているように見えました。お墓に接した住まいを見せてもらいましたが、どこで調理をするのだろう、トイレお風呂はどうなっているのだろう。９か月の妊婦にどこで赤ちゃんを産むのか尋ねたらここだと聞いて変に納得しました。
このようなスラムに BDP が寺子屋を行っているのを嬉しく感動を覚えました。

聞くところによると、私が YWCA で接していたような子供たちで、家庭の崩壊によって放り出されたストリートチルドレンがダッカにはいると聞いています。
BDP がそこまで手を広げることは難しいと思いますが、将来の課題として覚えていただきたいと思います。
将来、BDP の活動がバングラデシュの国に重要な役割を果たしていることを国に認めさせ国中に活動を広げていくことが私の夢です。

ACEF の活動を全然知らなかった私がこの旅に参加させていただき、現地の生活、学校をとおしての子供たちとのふれあい、バングラデシュの国について知ることが出来ました。
先生方はじめ皆様の深い思いを、お分かちいただきまして、BDP の抱えている問題や将来のあり方について知ることが出来ました。
微力ですが ACEF の活動を仲間に知らせることと、祈りに覚えたいと思います。
最後に、先生方と深くお交わりいただき、ご指導いただいたことと、皆様の温かいお交わりによって支えていただきましたことを、心から深く感謝いたします。

ACEF

エイセフ The Asia Christian Education Fund